

## 資料と公共性 : 2021年度研究成果年次報告書

岡崎, 敦

九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

池上, 大祐

琉球大学国際地域創造学部 : 准教授

今井, 宏昌

九州大学大学院人文科学研究院 : 専任講師

多川, 孝央

九州大学情報基盤研究開発センター : 准教授

他

<https://doi.org/10.15017/4772780>

---

出版情報 : 2020-03-07. 九州大学大学院人文科学研究院

バージョン :

権利関係 :

### 3. シンポジウム「情報管理組織のミッションと専門職養成」

日時：2021年11月27日（土）13時30分~17時

会場：九州大学中央図書館4階 きゅうとコモンズ

オンライン、後日 YouTube 公開

主催：九州大学大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻、九州西洋史学会

共催：九州大学附属図書館、九州大学大学文書館、九州歴史科学研究会

プログラム

岡崎 敦 「趣旨説明」

大沼太兵衛「デジタル時代に求められる司書の専門性とは」

平野 泉 「アーキビストは資料・情報管理の専門職なのか」

コメント：渡邊由紀子（九州大学附属図書館）

パネルディスカッション

九州大学の諸組織、および福岡に拠点を置く2つの歴史系学界の主催、共催により開催されたシンポジウムであり、本研究は、企画から登壇者の決定、準備段階から事後までの運営に関する全般について、実質的に担当した。共同主催の大学院ライブラリーサイエンス専攻は、本研究の連携組織でもあり、2019年1月には、「オープンデータと大学」と題するシンポジウムを共同開催した。今回は、歴史資料の適正な管理と利活用、大学における歴史教育の拡張という観点から、本研究の関係者が所属する2つの歴史学会の主催、共催を得た。

シンポジウム当日は、まず主催者2組織を代表して、本研究の代表者である岡崎より（ライブラリーサイエンス専攻の専任教員、九州西洋史学会代表理事）、企画の趣旨が説明されたのち、ゲストスピーカーによる2つの報告が行われた。休憩後は、共同研究のメンバーから、企画の趣旨にそって両報告を補完する内容の報告がなされたのち、全体討論を行った。

国立国会図書館にご勤務の大沼太兵衛氏は、フランス国立文書学校での勉強やご所属先における大規模な史資料のデジタル化プロジェクトに関わられた経験を背景として、デジタル時代の図書館司書に求められる専門性について、幅広く論じられた。たとえば、史資料のデジタル・アーカイブ化は、単にデジタル空間へのオブジェクトの公開という技術的な問題だけではなく、法制度上の処理、財務、マーケティングを始めとする様々な課題の解決のみならず、多様な専門家との協力関係を構築し、全体をコーディネートする役割も求められる。特に重要なのは、物理的実体から解放されたデジタル空間においては、資料の関連付けによるあらたな価値付けという創造的な行為が重要であり、図書館における

デジタル・アーカイブの企画立案は、博物館分野における「キュレーション」に近いともいえる。そこでは、特定技術や特定コンテンツの理解よりも、全体を差配しながら、あらたな価値を生み出す高度専門職が求められる。

二番目の報告者である平野泉氏は、立教大学共生社会研究センターのアーキビストをお勤めで、日本で唯一のアーカイブズ学研究、教育機関である学習院大学大学院アーカイブズ学専攻の修了生である。「日本における反アパルトヘイト運動とその記録」(2019)；「研究者アーカイブズを考える：歩き、読み、書いた二人の事例」(2018)；「市民運動の記録を考える：アーキビストの視点から」(2016)などの業績に加えて、2021年には、「市民が作る・市民が使うアーカイブズ—アクセスをめぐる課題」と題するオンライン・シンポジウムを企画運営なさるなど、多彩な活躍で知られる。市民社会の側から(国家や組織、業界団体ではなく)、適正な史資料の管理と価値付けの課題を実践なさっている稀有な存在であり、情報管理専門職のあり方自体を再検討するシンポジウムには不可欠な存在であると認識している。今回は、情報管理の原理的、倫理的問題に踏み込む野心的な報告をいただいた。

渡邊由紀子氏は、九州大学附属図書館に勤務する現職の司書であるとともに、大学院ライブラリーサイエンス専攻の専任教員も務められている。このような学界と実践の場をまたぐキャリアは、欧米ではごく普通であるが、日本では、研究者のキャリア形成のあり方が狭く、結果的にアカデミアと社会との関係が、特に人社系研究・教育では断絶している。渡邊氏には、このような困難な状況の下、図書館、特に大学図書館における両者をつなぐ取り組みについてご報告いただいた。具体的には、オープンサイエンス、オープンデータの動きへの対応、「オープン化」と裏腹の関係にある研究データ管理への関与、そして、業務の現場と研究の最前線をつなぐ大学院教育のあり方である。

以下は、各報告者が、当日の報告をもとに、あらたに書き下ろしたものである。さらに、当日は発言の機会がなかったが、対面で参加なさった共同研究メンバーの清原和之氏に、シンポジウム全体の意義を、学界、業界の動きのなかで再検討するコメント原稿を掲載した。清原和之氏は、ライブラリーサイエンス専攻の第1期修了生であるとともに、日本の国立大学法人で最初に設けられた公文書管理教育の大学院コース専任教員でもある。清原氏の研究上の関心は、市民社会のなかでの文書記録のあらたな価値付けや責任ある管理のあり方であるが、それを担う専門職の社会の中での位置づけにも関心を寄せておられる。合わせてご参照いただきたい。